□読み終ったら読んでない人にあげてください。コピーもご自由に。

小栗上野介情報　４９

２０１１（平成２３）年4月

発行　東善寺　住職　村上泰賢
群馬県高崎市倉渕町権田（ごんだ）１６９
〒：370-3401　TEL&fax：027-378-2230
振替　00120-1-406206　東善寺
ホームページ http://tozenzi.cside.com/　　Eメール：sharmila@theia.ocn.ne.jp

5月22日（日）小栗まつり　予報

小栗父子主従非命144回忌
主催：小栗上野介顕彰会

▲小栗様チンドン倶楽部（昨年）

会場：倉渕小学校で
午前10時～　**記念演奏会**　群馬マンドリン楽団

トミーポルカ、小栗讃歌、行進曲「小栗公メリケンを行く」、朗読と演奏「維新無情」など小栗上野介・幕末関連の曲のほか、新たにアメリカで見つかったトミー（立石斧次郎）の曲二つ「Japanese Galop」と「True Blue Polka」をマンドリン曲に編曲して、日本での初演奏をします。

午前11時～　**記念講演会**

講演「小栗上野介の日本改造」住職　村上泰賢

会場：東善寺で――――午前１１時～午後も　随時　**紙芝居**

「小栗上野介の生涯」島田実恵子

トミーの楽譜　二つ、見つかる

遣米使節の通訳見習いの少年立石斧次郎が「トミー」とよばれてアメリカで大人気となり、記念のポルカ「トミーポルカ」が作られた。この曲は1980（昭和55）年に楽譜が見つかって、マンドリン曲に編曲し、毎年小栗まつりで演奏している。このほど、アメリカで小栗上野介や幕末史を研究しているマイケルワート氏（マルケット大学准教授・元倉渕中学校ＡＬＴ）から、さらに二つのトミーの音楽の楽譜を見つけた、との情報があった。

▲「Japanese　Galope」表紙に「立石斧次郎」のサインが印刷されている。画像も未見のもの。

楽譜は「Japanese Galop・ジャパニーズ　ギャロップ」というテンポの速いギャロップという曲と、「True Blue Polka・トゥルー　ブルー　ポルカ…本当のポルカ」の二つの曲で、いずれもフィラデルフィアの音楽社発行となっていることから、「トミーポルカが人気になったので、そのあとに作曲されたものだろう。遣米使節団がアメリ

昼市

歴史ファンの楽しい交流の場

昼市への出店申し込みは、5月１５日までに　東善寺へ

近年、出店申し込みが多くなっています。地元の手作りのお店を歓迎しますので、グループの資金作りなどにふるってどうぞ。

小栗まつり　「勝手に前夜祭」に参加しませんか＿

ボランティアスタッフ募集

手づくりの小栗まつりをめざしボランティアスタッフを募集します。

(県・町の内外を問いません)。

２１日(土)午後１：30集合～テント張り、看板つけ、昼市準備、

２２日(日)午前9：00～　駐車場誘導、片づけなど

＊雨天決行＊

＊遠方の方は２１日夜寺に宿泊可能（作業着・雨具・シーツ・パジャマ　持参）

□小

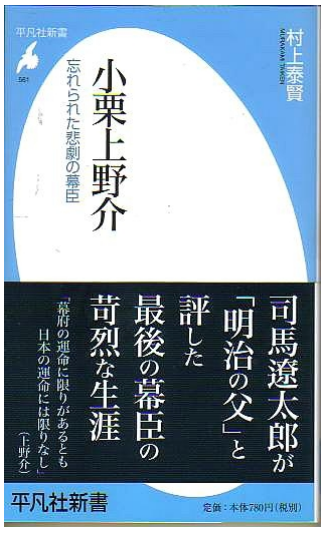
▶外国人ボランティアも交え、参加者がたのしい自己紹介

小栗上野介展 盛会！

小栗上野介顕彰会主催で平成22年12月4日～14日に高崎市シティギャラリーで開催した小栗上野介展は二千人を超える参観者が、日本の近代化に果たした小栗上野介の業績をパネルなどで確認、「小栗の人物がよくわかりました」「明治政府は惜しい人を殺してしまった」という感想が聞かれました。

初日のオープニング行事では、群馬マンドリン楽団による記念演奏と徳川恒孝氏（徳川18代宗家）の講演「日本の心―近世から近代へ―」があり、「江戸時代は世界史でもまれな260年間戦争をしない平和な政治が今に続く日本文化を育て、質素を旨とする〈知足〉の考え方を大事にしてきた」「これからの世界はもう一度この知足の精神を学ぶことが大切」と語りました。

紙芝居「小栗上野介の生涯」も随時上演し、好評でした。



◇平凡社新書「小栗上野介」

村上泰賢著　８００円（税共・寺での特価）

主な内容

・遣米使節150年にあたり、小栗上野介の日本近代化の業績の端緒となった遣米使節（1860万延元年）の旅で、アメリカで何を見、体験したかをたどる。

・帰国後8年間、日本の行く末を見据えて行なった日本改造の業績を検証。

・横須賀製鉄所は、日本最初の本格的な蒸気機関を原動力とする総合工場で、「製鉄をしない」総合工場だった。

・横須賀製鉄所（造船所）の建設にあたり小栗上野介は、「幕府の運命と日本の運命」という言葉で、幕府がつぶれても日本は残る、その日本のために仕事をすると語った。

海上自衛隊横須賀地方総監が

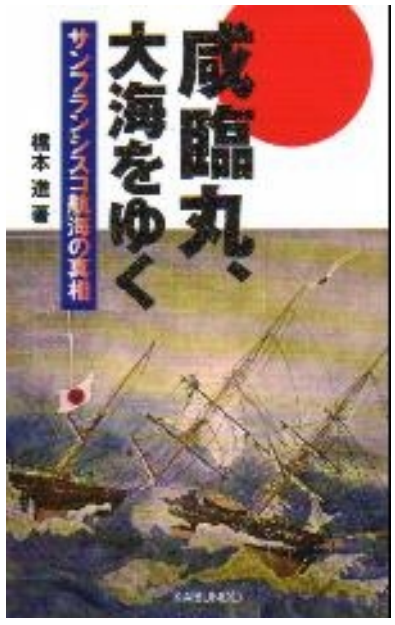
小栗公の墓参

2月18日（金）、海上自衛隊横須賀地方総監の高嶋博視海将が現職として初めて東善寺に参拝し小栗公の墓参をした。「日本の夜明けに貢献した人物で、どうしてもお参りしたいと思っていた」と語り、住職が所用のため市川平治顕彰会長が案内と説明を行った。　▼毎日新聞　2月19日

◇咸臨丸、大海をゆく

―サンフランシスコ航海の真相―　橋本　進著　海文堂

1500円+税



主な内容

・著者は元練習帆船「日本丸」の船長で、咸臨丸の航海と同じコースを帆走している。

・咸臨丸派遣の背景となった、幕末の政情から解説。

・オランダ製の咸臨丸の機関や装備について、同型艦を元に専門的な構造を解説した図は、素人にもわかりやすく貴重な資料となっている。

・艦長格の勝海舟が、船酔いでほとんど役に立たなかった顛末（てんまつ）も、史料をもとに解説され、その無責任ぶりが際立つ。昭和初年の軍備拡張競争の時代、日本が国際的に孤立化の時代に、「咸臨丸・勝海舟は日本人だけで初の太平洋横断」という誇大に広められた虚像について、筆者は「咸臨丸の航海を調査すればするほど、その宣伝とは裏腹な勝海舟像が浮かんでくる」と述べる。

・しかしまた、「勝の凄いところは、咸臨丸での生活で自分の欠点を知り、以後の生き方に反映させたこと」として、「「集団の外に自分を位置させるようになった」ことで、勝は「アメリカ滞在中に見聞した最先端技術の知識と相俟って、日本という国を冷静に見つめることができたのであろう」としている。

お知らせ

「日本の100人小栗忠順」ディアゴスティーニ社入手困難なこのシリーズの復刊計画が始まりました。同社ではとりあえず100人を復刊の予定。105人目の「小栗忠順」が復刊に入るかは未定です。本屋さんに復刊希望を伝えて後押しし

新聞　貼付